

海の環境教育「漂着物調べ」

気仙沼市立気仙沼小学校 小松英紀

はじめに

子どもが、外国とのかかわりを意識し、ワクワクしながら自分から地図帳を開きたくなるような気持ちにさせたいと考えた。そこで、環境クラブでの「海岸の漂着物を調べる活動」に地図を活用してみることにした。

1. 漂着物にロマンを…

ここで言う漂着物とは、ほとんどがごみである。ペットボトルや紙パックなど、軽くて浮くものは今や世界中の海岸という海岸を埋めつくしている。

ある日、見慣れぬ牛乳パックをみつけた。よく見ると、遥々地球の反対側のチリからやってきたものであった。私は、ごみを拾ったというより、素敵な宝物にであったような気持ちになった。

この牛乳パックなどの海外からの漂着物を子どもに見せたところ、「すごい、本当に外国のごみがくるの?」と目を輝かせた。

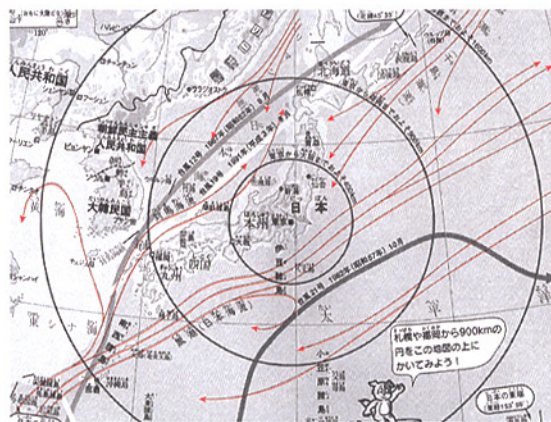
2. 外国からの漂着物を探せ!

学校から車で30分程度の海岸で漂着物調査を行った。多くのごみの中から、次々と外国のごみがみつかった。子どもたちは私にどこの国のものかを確認すると、すぐにその国や地域の場所を地図で確かめた。一番多いのが韓国で、ほかにマレーシア、中国、台湾、アメリカ、ロシアのものもみられた。子どもたちは地図上の国の位置と遠い水平線を見比べながら、「ごみだけど、よく日本まで流れてきたなあ」と感動していた。

3. 漂着物の流れ着く仕組みは?

後日、漂着物のルートを考える活動を行った。地図上で、漂着物が流れてきた国とのおおよその距離を計算し、どのようなルートで漂着したのかを地図上でひもを操作しながら予想させた。そして、どのような仕組みで漂着したのかを考え

させると、風の影響という意見もでたが、一人が海流の働きだという意見をだした。漂着物が流れてきた国の位置を確かめて、どのような海流がありそうか予想し、地図帳で日本付近の海流を確認した。ただ、特に韓国からの漂着物に対する影響が強い、日本海から太平洋に抜ける津軽暖流については、子どもがどうしても考えつかず、ほかの専門的な資料を活用してまとめさせた。



終わりに

漂着物という学習素材を使って、切実な環境問題と外国とのかかわり、海流の働きなどを関連づけた学習が展開できたと思う。あの学習以来、子どもたちは国の内外にかかわらず品物を見るたび、「これはどこからきたのか」と興味を抱くようになってきている。

今後、環境教育との関連で地図を活用する機会も増えていくと考えられる。地球規模の問題を考える資料として地図の役割はますます大きくなる。